



パトロールに出るため車両に乗り込む筑波学院大の学生＝つくば市吾妻

超小型モビリティ活用

筑波学院大生が安全。パトロール

一人乗り電気自動車「超小型モビリティ」を利用した安全パトロール活動を、筑波学院大（つくば市吾妻）が8日、市内でスタートさせた。市の超小型モビリティ活用事業の実証実験に協力するもので、車両2台を借りて約1カ月間、学生が子どもの見守り活動を行う。

（橋本ひとみ）

パトロール活動は、学生5人が担当する。同一対象に立ち乗り型電気自動車参加活動の授業の一環として、2013年10月から二輪車「セグウェイ」環境。2年生3人と3年から近くの吾妻小学校を、利用したパトロール

をしている。超小型モビリティの活動開始で、セグウェイが実験

的に走行できる実験特区から、パトロールの活動範囲が広がる。一人乗り車両2台を学生が運転し、北部エリアなどを対象に小中保育園などの周辺を回る。下校時間に合わせ週に1〜2回、約30分の距離を2時間ほど予定する。普通運転免許

で運転できるが、学生は運転に必要とされる事前講習を受講した。活動範囲になる市立吉沼小出身の経営情報学部2年田志穂実さん（20）は「母校の周りを見まわって、学生が通いやすい環境にしていきたい」と意欲を話した。

超小型モビリティは昨年2月に市が導入し、車両10台を所有する。地域の低炭素交通スタイルの実現に向け、約2年間のさまざまな実証実験を行っている。公用車や市の防犯パトロール、通勤などの利用に取り組み、今後も商店の配達業務などの実験を予定する。